

# 総合講座「沖縄にいらっしやい」の6年間のあゆみ

～2015年から2020年までの記録～

友利 将吾

(数学科)

tomori.shogo@musashi.ed.jp

## 要 旨

この報告書は2015年度に私が初めて総合講座を開設してから2020年度までの6年間の記録である。1学期にどのような準備をし、夏休みにどのような活動をし、2学期、3学期でどのようにまとめて4月の記念祭で公開しているか、の一連の流れを、5年分示している。特に沖縄での活動について5年間でどのようなことを行ったのかを集中的に取りあげている。また、2020年度の新型コロナウイルスの影響下での活動も記した。

**Keywords:** 総合的な学習の時間、総合的な探求の時間、沖縄

## はじめに

本校では高校1年生の総合的な学習の時間（現在は総合的な探求の時間）として、各教員が「総合講座」を開講し、その中から生徒が講座を選択するシステムになっている。私は自分自身が沖縄出身だということと、他の教員からの勧めもあって、実際に沖縄に行って学ぶ形の総合講座を開講することにした。本校の小池教諭が長崎県対馬島で精力的に活動されていることと、春山教諭が当時開講していた岩手県釜石市でのボランティアに2014年に参加させていただいたことも大いに影響した。

私自身、生まれ育った沖縄に何かしら貢献したいという思いがあったので、沖縄に生徒を連れていくことで生徒も勉強になるし、わずかでも沖縄の経済に貢献できれば良いと思った。また、生徒たちがより沖縄に関心を持って、「また行きたい」と思ってくれれば観光立県である沖縄にとっても良いであろう。

講座を開講してみて思ったことは、私自身沖縄についてあまりにも無知であったということである。高校までの18年間で沖縄で過ごしてきたわけであるが、その間学校で多少沖縄の歴史について学んだ以外は何も知らなかった。この講座は、そういう意味では私自身が一番学んでいる講座でもある。

今回の報告書では、本来は5年間のまとめを書く予定であったが、新型コロナウイルスによる世界的な混乱の中、この紀要の発行が遅れたため、2020年度の内容も書くことができたので、結果的に6年分のまとめになった。

## 1. 講座内容

本講座は1学期の「事前学習」と「行程決め」、「保護者説明会」、夏休み期間の「沖縄での調査・活動」、2学期以降の「論文作成」、「保護者報告会」、そして翌年4月の「記念祭発表」から成る。ここでは、それぞれの内容について詳しく見ていく。

### 1-1. 講座の目的

講座を開講するにあたって、ただ沖縄に行くだけでは全く意味がないので、「沖縄に行って何がしたいのか」（研究テーマ）を先に考えてもらうことにした。自分のやりたいことを決めた上で、それに基づいて自分たちで行程を考えてもらった。一般的な修学旅行では既に行程が決められていて、それに基づいて生徒たちは行動する。しかしそれでは生徒の自主性は育たないと考え、飛行機の手配から宿泊施設の予約、必要な施設の予約まで自分たちでやってもらった。また、それぞれの興味関心に基づいてバラバラに行動するのではなく、それぞれの興味関心についても関心を抱いてほしいため、グループ行動を前提とした。

ただし、すべて自分たちの好きなように予定を組まれると今度はただの旅行になってしまうので、あくまでも勉強をしに行くという意識を忘れさせないために、適宜私が必要だと思う行程を付け加えた。端的に表現すれば「自分たちで作る修学旅行」をイメージした。

### 1-2. 1学期の活動

1学期は週に1回7限の時間や場合によっては昼休みに集まって、沖縄に行く期間や訪問先・宿泊先の選定、ルート決めを行う。それらは当然研究テーマに依存する。

生徒たちは自分たちの興味関心の中から、様々な研究テーマを考えてくる。例年多いのは「沖縄戦」と「基地問題」、そして「沖縄の文化」である。それ以外にも「沖縄の城」や「沖縄のサンゴと海洋動物」、「琉球方言」、「沖縄の食事」などがこれまでに挙げられた研究テーマである。

1年目は事前にテーマを決めた後は、専ら日程・行程決めに時間をかけていた。しかし2年目に、私の総合講座に協力してくれた卒業生（87期）の石井博己さんに「沖縄に関する本を読んで事前学習をした方がいい」と提案していただき、岡本太郎の『沖縄文化論』（中央公論新社、1996年）を紹介していただいた。したがって2年目から事前学習が始まった。このように2年目は図書を指定したが、受講生からは「時代が古くて読みにくかった」な

ど否定的な意見も寄せられたので、3年目以降は『沖縄文化論』に限らず、自分の研究テーマや興味関心に即した図書を選び、それについての感想文を書いてもらう形式にした。以下にこれまでの受講生が選んだ図書を載せる。

事前学習用図書

- 2015年度（受講生5名）：なし
- 2016年度（受講生5名）：岡本太郎『沖縄文化論』（中央公論新社，1996年）
- 2017年度（受講生5名）：岡本太郎『沖縄文化論』（中央公論新社，1996年），  
奥野修司『ナツコ 沖縄密貿易の女王』（文藝春秋，2007年），  
川平成雄『沖縄 空白の一年』（古川弘文館，2011年），  
野沢伸平『沖縄県の歴史散歩』（山川出版社，2014年），  
櫻澤誠『沖縄現代史』（中央公論新社，2015年）
- 2018年度（受講生2名）：岡本太郎『沖縄文化論』（中央公論新社，1996年），  
伊波園子『ひめゆりの沖縄戦』（岩波書店，1992年）
- 2019年度（受講生8名）：岡本太郎『沖縄文化論』（中央公論新社，1996年），  
新井祥穂・永田淳嗣『復帰後の沖縄農業』（農林統計協会，2013年），  
戸川幸夫『イリオモテヤマネコ “生きた化石動物” の謎』（琉球新報社，2015年），  
八原博道『沖縄決戦－高級参謀の手記』（中央公論新社，2015年），  
新崎盛暉『私の沖縄現代史』（岩波書店，2017年），  
高良倉吉『沖縄問題－リアリズムの視点から』（中央公論新社，2017年），  
岸政彦『はじめての沖縄』（新曜社，2018年），  
山里純一『沖縄のまじない』（ボーダーインク，2019年）
- 2020年度（受講生5名）：外間守善『沖縄の歴史と文化』（中央公論新社，1986年），  
高文研編集『沖縄は基地を拒絶する』（高文研，2005年），  
安里進ら『県史47，沖縄県の歴史』（山川出版社，2010年），  
八原博道『沖縄決戦－高級参謀の手記』（中央公論新社，2015年），  
湧上アシャ『ブルーノートスケッチ』（ボーダーインク，2019年）

また、例年7月の特別授業期間中に、「保護者説明会」を行っている。これは「なぜ沖縄に行く必要があるのか」、「何をしに沖縄に行くのか」を生徒自身の言葉で保護者に説明するために開いている。日程や予算案の説明も生徒が行う。私からは現地での交通手段など事務連絡が主であり、「生徒の研究テーマが沖縄に行くにふさわしくないと感じるのならば、無理に行かせる必要はない。その場合は文献調査で単位を認定する」と伝えているが、これまでのところ沖縄に行けなかった受講生はいない。ただし、2020年度は新型コロナウイルスの影響で、学校として宿泊を伴う活動ができなかったので除く。

### 1-3. 沖縄での活動

例年1週間程度沖縄本島で活動しているが、5年分の活動をここに書くとしても長くなってしまいますので、第2章で詳しく述べることにする。

沖縄での移動手段は専らレンタカーである。理由は荷物を持った上で公共交通機関だけで回るのはかなり現実的でないのと、待ち時間が増え思うように回れなくなるからである。

また、本校の伝統でもある「現地集合・現地解散」を前提としている。これは、私自身がレンタカーの運転に慣れるためと、目的地の場所を事前に確認するために下見をしているからである。

### 1-4. 2学期以降の活動

2学期以降は専ら沖縄に行って学んだことをまとめる時間である。受講生は1日目から最終日までどのような活動をしたのかの活動報告書を分担して書き、また、それぞれの研究テーマに基づいた論文作成を始める。

3学期の特別授業期間中(3月中旬)に「保護者報告会」を開いている。そこで保護者に対して沖縄で何を学んできたのか、自分はどう感じたのかまとめたことを発表する。残念ながら2019年度の報告会は、2020年3月2日からの学校一斉休業で中止となってしまった。

4月の記念祭において、総合講座のブースで沖縄のコーナーを設置させてもらっている。そこで受講生たちの論文をまとめた小冊子を配っている。

## 2. 沖縄での活動と友利の所感

2015年度から2019年度までの沖縄での行程を挙げ、それぞれについて振り返る。

2015 年度行程

- 8/31(月) 那覇空港集合 →南部へ移動  
平和祈念公園見学, がんがら一の谷見学, 沖縄ワールド玉泉洞見学,  
友利曾祖母宅着
- 9/1(火) 友利曾祖母宅発 →中部へ移動  
中城城址見学, 嘉数高台公園から普天間基地を俯瞰する,  
座喜味城址見学, アメリカンビレッジ見学  
ペンション着 (ペンション ムーンヴィラ)
- 9/2(水) ペンション発  
青の洞窟でシュノーケル体験, 琉球村見学, もう一度青の洞窟体験  
(宿泊先は2日目と変わらず)
- 9/3(木) ペンション発 →北部へ移動  
マングローブ見学, 辺野古基地周辺の見学  
ホテル着 (ロワジールホテル沖縄美ら海)
- 9/4(金) ホテル発  
美ら海水族館見学, OKINAWA フルーツランド見学, 今帰仁城址見学  
(ホテルは4日目と変わらず)
- 9/5(土) ホテル発  
エメラルドビーチ遊泳 →那覇へ移動  
首里城見学  
ホテル着 (ロワジールホテル那覇)
- 9/6(日) ホテル発  
斎場御嶽見学, 国際通り見学  
那覇空港着 東京へ

付添: 豊住伸治 (2日目~4日目), 水上雄亮 (5日目~7日目), 友利父 (ドライバー)

1年目は今思うと私の家族に相当協力してもらった。その年の3月のスキー教室において、私が左膝の前十字靭帯を断裂してしまい、8月に手術をしたばかりだった。左膝だったので運転には支障はないだろうと思っていたが、父が「万が一があってはならない」とドライバーを買って出てくれ、その言葉に甘えさせてもらった。4日目に皮下出血が発覚し、足の下の方に血液が溜まって紫に変色しているのが確認されたので、結果的にお願いして良かったと思っている。また、その時に父から「行ったことがない場所にも行くのだから下見をするのが当然だ」と言われ、毎年前日に下見をするようになった。

1日目は平和祈念公園から始まっている。平和祈念公園には沖縄戦について学べる資料館と戦没者の名前が刻まれた「平和の礎」があり、平和学習の要となる場所で、毎年足を運んでいる。



図1 平和の礎で戦没者名を見る受講生たち（2015年撮影）

驚いたことに、初年度はひめゆりの塔には行っていなかった。おそらく、次の予定の「がんがら一の谷」が予約制なので、時間の都合上行けなかったのだと思われる。

がんがら一の谷では、ガジュマルの木の説明や、鍾乳洞の成り立ち、沖縄の地形がどのようにできたのか、といったことがガイドから説明してもらえる。また、港川人の遺骨が出てきた場所でもあり、現在も発掘調査が行われている。

がんがら一の谷のすぐ隣には、沖縄ワールド玉泉洞という日本でも最大級の鍾乳洞がある。玉泉洞も毎年のように足を運んでいる。玉泉洞では鍾乳洞の他に沖縄の伝統芸能のひとつであるエイサーを見ることもできる。

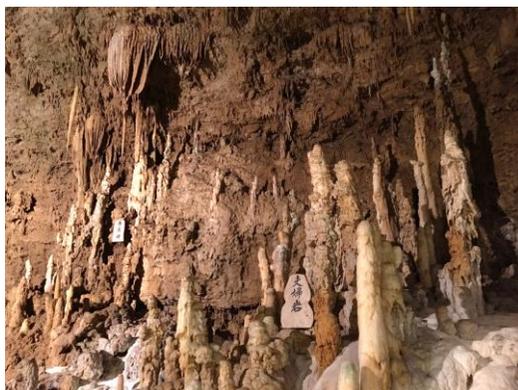


図2（左）がんがら一の谷で説明を聞いている様子（2015年撮影）

図3（右）玉泉洞内の鍾乳石（2018年撮影）

この日は私の曾祖母の家に泊まった。曾祖母は当時98歳で、琉球方言の話者でもあるので受講生たちに琉球方言を直に聞いてもらおうと思ったのと、家も昔ながらの沖縄の家なので、そのような家での生活を体験してもらおうと思ったからである。また、沖縄の家庭料理についても知るいい機会だったので、私の母に頼んでゴーヤーチャンプルーなどの典型的な沖縄料理を作ってもらった。曾祖母の家には他に大伯父といとこ違いも住んでいるので、彼らにも少し相手をしていただいた。ただ非常に残念なことに、その日曾祖母は少し体調が良くなく、受講生たちと対話をする時間を持つことができなかった。それでもなんとなくは沖縄の一般家庭の様子を知ることができたと思う。また、A&Wの「ルートビア」や、泡盛を使った調味料「コーレーグース」など、本土ではあまり口にできないものを口にすると、特徴的な味に驚いていた。



図4 友利曾祖母の家（2020年撮影）

2日目はまず中城城址に向かった。2015年度の受講生の中に、「沖縄の城」について関心のある生徒がいたため、この年は「中城城址」、「座喜味城址」、「今帰仁城址」、「首里城」と4つの城跡に足を運んだ。私自身城跡の名称しか知らず、誰がいつ建てたのかも知らなかったもので、すごく勉強になり、興味を持つようになった。今回は行程の制約上「勝連城址」に行けなかったのが残念である。

中城城址ではボランティアガイドの方に案内してもらった。恥ずかしながら私はこのとき初めて沖縄（琉球）にペリーが来ていたことを知った。歴史について学ぶ時間となった。



図5(左), 図6(右) 中城城址内を案内してもらっている様子 (2015年撮影)

続いて、嘉数高台公園から普天間基地を俯瞰した。これは私がぜひ生徒に見せたいと思っていて行程に入れたものであり、毎年行っている。この年はちょうどオスプレイが配置されていた。また、普天間基地が住宅地のど真ん中にある様子も知ることができ、米軍基地が県民の生活にどのような影響を与えているか考える時間になった。



図7(左) 展望台から普天間基地を俯瞰している様子 (2015年撮影)

図8(右) 普天間基地にオスプレイが配置されている様子 (2015年撮影)



図9(左), 図10(右) 座喜味城址内を見学している様子 (2015年撮影)

3日目は午前と夜に2回もシュノーケリングをしていた。これは、昼の海の生物と夜の海の生物を両方観察したいと生徒に切望されて、しかたなく認めたのだと思う。私自身は、前述のとおり膝の手術の直後だったため、マリンスポーツは行わなかった。したがって写真がないのが残念であるが、受講生の感想によると、夜は夜光虫が光って綺麗だったようである。昼は「琉球村」という文化体験施設を訪れた。「琉球村」ではハブを首に巻いたり、サトウキビを搾った汁のジュースを飲んだりといった体験をした。

4日目は朝からカヌーに乗ってマングローブ見学を行った。当初は予約した受講生が昼だと言っていたのでそのつもりで行動していたのだが、前日くらいに「朝7時50分集合でした」と言われ、朝6時くらいから急いで出発した。この出来事で「生徒に全部任せるのはやめよう」と決心した。朝は名護のA&Wでハンバーガーを買って車の中で食べるというありさまだった。なんとか時間には間に合ったが、父には無理な運転をさせてしまった。

受講生が予約したのは「やんばる自然塾」のカヌー体験だった。受講生が5人で奇数だったが、カヌーは2人乗りということで、急遽私も乗ることにした。ガイドの方からはマングローブは木全体の呼称で、木の名前は「ヒルギ」ということ、慶佐次川の「ヒルギ」には「オヒルギ」、「メヒルギ」、「ヤエヤマヒルギ」の3種類あることなどを学んだ。また、マングローブ内に生息する動物についても学び、非常に勉強になった。しゃこが泥を積み上げているのだが、しゃこそのものは見えなくても独特の生態系を感じさせる。潮の満ち引きも非常にはっきりしていて、干潮時の川の姿に毎年受講生は驚く。

「やんばる自然塾」には初年度毎年お世話になっている。また、やんばる自然塾のすぐ近くの「食事&喫茶 あいうえお」という食堂も、量が多く安価でおいしいので、毎年利用させてもらっている。



図 11 マングローブ林でカヌーをしている様子 (2018 年撮影)



図 12 干潮時の慶佐次川の様子 (2019 年撮影)

午後は辺野古基地周辺に向かった。これも基地関連でよくニュースになる辺野古がどのような場所なのか知ってもらうために私が行程に入れた。辺野古には基地反対派の方が運営するテント村があり、そこで話を聞いた。受講生には容認派、反対派、それぞれの考えを聞いたうえで自分の考えを持ってほしいと思っている。



図 13 (左上) 辺野古基地建設の様子 (2018 年撮影)

図 14 (右上) 辺野古基地建設の様子 (2019 年撮影)



図 15 (左下) 辺野古テント村にある資料 (2019 年撮影)

5 日目は美ら海水族館、OKINAWA フルーツランド、今帰仁城址に行った。美ら海水族館に関しては、有名なジンベエザメや熱帯魚を見ることも大切だが、サメの生態やサンゴの作りなどを学ぶことができるコーナーもあるので、そこにも足を運んでほしい。また、個人的には、イルカの胃から出てきたゴミ袋の展示をぜひとも見てほしい。2020年、小泉環境相がレジ袋を有料化したが、その是非はさておき、ゴミ袋をクラゲと間違えて食べてしまう海洋動物は多い。そういった事実を知るだけで、安易にビニール袋を捨てる気持ちもなくなるだろう。そのようなことを学ぶ機会にしてほしい。



図 16 イルカの胃から出てきたゴミ袋の展示（2019年撮影）

OKINAWA フルーツランドは 2015 年度しか行ってないが、中では様々なクイズが用意されていて、主に沖縄の植生について学ぶことができるようになっていた。

午後に行った今帰仁城址も、見事な石垣が残っていた。



図 17 今帰仁城址城郭（2015年撮影）

6日目は、午前中は元々エメラルドビーチで泳ぐことが予定されていたので、リフレッシュも兼ねて遊ばせる時間を設けた。そして北部から一気に那覇へ戻った。那覇では首里城見学を行った。首里城は毎年行っている。



図 18 (左) 首里城正殿 (2015 年撮影)



図 19 (右) 琉球王朝時代の石垣と再建された石垣の境目の表示 (2015 年撮影)

7日目は最初に「斎場御嶽」に行った。元々は行程にはなかったが、父が「せっかく沖縄に来たのに斎場御嶽に行かないのはもったいない」と言って行くことになった。「斎場御嶽」は琉球王朝時代にユタ（神言を受ける女性）が祈っていた場所で、「最高の御嶽」を意味する。当時は男子禁制だった。今は「パワースポット」的な意味合いで観光地化しているが、神聖な場所であり、今でも地元住民で拝みに来る人がいる。

お昼から午後にかけて国際通りに繰り出した。国際通りでは観光客用にお土産店が立ち並んでいるが、昔からの市場である牧志公設市場が沖縄の生活を知る上では重要である。牧志公設市場では、私の子供の頃の記憶ではおそらく 90 年代まではチラガー（豚の顔の肉）がそのまま売られていたが、今では衛生上の問題でパック詰めにされて売られていた。1つだけ展示用にパックから出されて飾られていた。公設市場は、「1階で買った魚などを2階で調理してくれる」ということでも有名であった。ただし、2019年に公設市場は別の場所に移転になったので、現在もそのシステムがあるかは調べられていない。



図 20 斎場御嶽 (2018 年撮影)



図 21 チラガーの展示 (2015 年撮影)

2016 年度行程

- 9/1(木) モノレール「県庁前駅」集合  
嘉数高台公園から普天間基地を俯瞰する →北部へ移動  
ちゅうみ水族館見学  
ホテル着 (センチュリオンホテルリゾート)
- 9/2(金) ホテル発  
マングローブ見学, 辺野古付近の様子を見学 →中部(むら咲むら)へ移動  
ホテル着 (ホテルモリマーリゾート)
- 9/3(土) むら咲むらにて各種体験:  
シーサー作り, シュノーケリング体験, ドラゴンボート, 沖縄そば作り,  
ちんすこう作り, など  
(ホテルは2日目と変わらず)
- 9/4(日) ホテル発 →那覇, 南部へ移動  
アメリカンビレッジ見学, 首里城見学, ひめゆりの塔, 平和祈念公園を見学  
ホテル着 (ユインチホテル南城)
- 9/5(月) ホテル発  
沖縄ワールド玉泉洞, がんがらーの谷を見学, 開邦高校の生徒と交流  
ホテル着 (ロワジュールホテル那覇)
- 9/6(火) ホテル発  
斎場御嶽見学のはずが台風接近で行けず  
帰りの便を早めたところ, 東京から飛行機が飛ばず欠航  
延泊が確定し, 那覇市内のゲストハウスに泊まる  
(沖縄ゲストハウス GRAND 那覇)
- 9/7(水) ゲストハウス発 那覇空港着 東京へ

付添: 村上豊 (1日目~4日目), 水上雄亮 (4日目~7日目), 石井博己 (87期OB)

2016年度の特筆すべき点は、付添いに87期の石井博己さん（慶応大学4年（当時））が来て下さった点である。数学科の村上教諭から「石井さんが大東島を始め沖縄に見識がある」と紹介していただき、お手伝いをしていただいた。石井さんには事前学習の必要性も教授していただいた。また、この年は前年度の反省を活かして、総合学習の一環だという認識をしっかりとってもらうために、レジャー的要素を減らして、文化体験や地元との交流を意識したものとした。加藤十握教頭から、読谷村の文化体験施設「むら咲むら」内で過去にお世話になった方が「よみたん自然学校」を開いているから行ってみるといいとアドバイスを受け、「むら咲むら」にも行くようになった。さらに、私の母校である開邦高校と連絡を取り、生徒同士の交流をする機会をいただいた。

2016年度からは、2015年度に行ったところは基本的に省略し、新たな取り組みに焦点を当てて紹介する。この年は5年間で唯一北部から回った年である。北部での活動は2015年度と大差ない。

3日目に初めて「むら咲むら」を訪れた。そこは様々な文化体験を行うことができ、受講生たちはシーサー作り、沖縄そば作り、ちんすこう作りなど、普段できない貴重な体験をさせてもらった。また、シュノーケリング体験もした。



図 22—図 25 むら咲むらでの各種体験（2016年撮影）

4 日目に南部に向かい、ひめゆりの塔と平和祈念公園を見学した。ひめゆりの塔は初めての場所となったが、同年代の女子学生の戦争体験に触れて、感じるものもたくさんあったと思う。熱心にメモを取っている受講生もいて、私自身感激した。



図 26 (左) ひめゆりの塔にある碑 (2016 年撮影)

図 27 (右) 平和の礎を前に合掌する受講生 (2016 年撮影)

5 日目に前年度同様沖縄ワールド玉泉洞とがんがら一の谷に行ったが、今年度は玉泉洞内で鍾乳石などの説明を受けるプログラムに参加した。このプログラムに参加したのは 5 年間でこの年だけである。また、この日の午後には私の母校である開邦高校へ行き、沖縄の高校生（生徒会メンバー）との交流を図った。日常生活の違いから沖縄の基地問題まで、色々とお話し合っていた。学校内でも案内していただいた。



図 28 (左) 玉泉洞内で鍾乳石の説明を受けている様子 (2016 年撮影)

図 29 (右) 開邦高校生徒会との交流 (2016 年撮影)

6日目、最終日に台風が沖縄本島に接近してきて、雨風が強くなってきた。ただし、車を出せないほどではなく、予定通り斎場御嶽に行った。しかし、斎場御嶽がそもそも入れないよう規制を行っていた。2年目にして初めての台風接近だった。お昼の便ならまだ飛ぶだろうと国際通りに行く予定を取りやめ、空港に向かい、便の変更をしてもらった。しかし、変更した便が東京から飛ばず、やむなく延泊せざるを得なくなった。水上教諭が迅速に宿の手配をしてくださり、その日は国際通り近くに泊まった。翌日には台風も過ぎ去り、難なく帰ることができた。受講生たちは期せずして国際通りに行くことができ、喜んでいて、台風が来たのが最終日で、そこまで行程に影響がなくて良かった。

2017 年度行程

- 8/30(水) 9:30 那覇空港集合  
旧海軍司令部壕見学 →南部へ移動  
ひめゆりの塔, 平和祈念公園を見学  
ホテル着 (ユインチホテル南城)
- 8/31(木) ホテル発 →中部へ移動  
嘉数高台公園から普天間基地を俯瞰する  
琉球大学内見学  
沖縄国際大学にて琉球方言に関する講義を受講  
中城城址見学  
アメリカンビレッジ見学  
ホテル着 (むら咲むらホテル)
- 9/1(金) むら咲むらにて各種体験:  
シーサー作り, シュノーケリング, ドラゴンボート, 沖縄そば作り,  
ちんすこう作り, など →北部へ移動  
ホテル着 (ゆがふいん沖縄)
- 9/2(土) ホテル発  
美ら海水族館見学  
マングローブ見学  
(辺野古見学のはずが, 生徒が忘れ物に気づき, 引き返した) →那覇へ移動  
ホテル着 (ロワジュールホテル那覇)
- 9/3(日) ホテル発  
首里城見学  
国際通り見学  
那覇空港着 東京へ

付添: 村上豊 (1日目~3日目), 水上雄亮 (3日目~5日目),  
石井博己 (87期OB, 3日目~5日目)

2017年度は2016年度を踏襲したが、沖縄戦を研究テーマに選んだ受講生から、「旧海軍司令部壕に行きたい」と要望があり、そこに行くことにした。また、琉球方言に関心のある受講生がいたため、沖縄国際大学講師（当時）の當山奈那氏に講義をお願いして、快諾をいただいた。また、今年度も87期OBの石井さんに付添いの協力をさせていただいた。

1日目、空港に着いたらすぐ旧海軍司令部壕に向かった。ここにはこの年以降毎年行っている。旧海軍司令部壕は地中に掘られており、司令部の自決の手りゅう弾の跡なども残っている。また、司令官の手紙の内容も展示されていて、沖縄県民が日本のために文字通り命を尽くしたこと、後世への格別なご高配を賜ってほしいこと、などが記されている。



図 30 海軍戦歿者慰霊之塔（2017年撮影）

2日目午前には琉球大学内の見学を行い、午後には當山奈那氏に講演をしていただいた。



図 31 琉球方言の講義を受けている様子（2017年撮影）

2018 年度行程

- 8/27(月) 9:00 モノレール「県庁前駅」集合  
旧海軍司令部壕見学 →南部へ移動  
沖縄ワールド玉泉洞にて鍾乳洞の観察  
友利曾祖母の家の外観見学，斎場御嶽見学  
ホテル着（ユインチホテル南城）
- 8/28(火) ホテル発  
ひめゆりの塔，平和祈念公園を見学 →中部へ移動  
嘉数高台公園から普天間基地を俯瞰する  
読谷村で民泊開始（入村式）
- 8/29(水) 民泊先（青山夫妻）のご家庭におまかせ  
朝からセリを見に行き，道の駅かでなから嘉手納基地を俯瞰した。  
昼は沖縄そばを手作りして食べ，午後は座喜味城址見学をして，その後チビチリガマとシムクガマを見学した。夜は豪華な手料理をごちそうになった。
- 8/30(木) 民泊終了（離村式）  
むら咲むらにて各種体験：  
シーサー作り，ちんすこう作り，サーターアンダギー作り，紅型体験，  
琉球ガラス体験など →北部へ移動  
ホテル着（ゆがふいん沖縄）
- 8/31(金) ホテル発  
マングローブ見学，美ら海水族館見学，辺野古見学  
ホテル着（同上）
- 9/1(土) ホテル発 →那覇へ移動  
首里城見学，国際通り見学  
那覇空港着 東京へ

付添い：少人数のためなし

2018年度から名称を「沖縄にいらっしやい」から「沖縄について学ぶ」に変えた。理由は、2017年度受講生から、『「沖縄にいらっしやい」だと遊びに行くように感じるから変えた方がいい』と言われたからである。

また、この年から民泊を取り入れるようになった。厳密には2015年に曾祖母の家に泊まっているので初めてではないが、業者を介して民泊をしたのはこの年が初めてである。ちょうど学校でも、海浜学校が終わり民泊実習を始めるために動き出していた。そこで加藤十握教頭が民泊することの大切さをかなり説いていたことと、小池教諭が対馬で民泊をして生徒が生き生きとしている様子を教えてくれたことで、「沖縄でも民泊をしたいな」という思いが芽生えた。幸い今年度は受講生が2人で、その内1人が「沖縄の文化」を研究テーマに選んでいたため、民泊も行程に入れやすかった。また、一晩だけ泊まっても意味がないので、中1日は民家の方と接してもらおうと思った。結果として、とても充実したものとなった。

3日目の民泊では、読谷村の青山家（青山勲・礼子夫妻）にお世話になった。生徒だけでなく、私自身も息子のように扱ってくださった。朝からセリを見に行き、都屋漁港の様子を見ることができた。私自身セリを見たのは初めての体験だった。次に「道の駅かでな」から嘉手納基地を俯瞰した。このような場所があることも初めて知ったし、道の駅かでな内には嘉手納基地の説明もあり、非常に勉強になった。お昼は手作りで沖縄そばを作り、午後は座喜味城址見学に行った。座喜味城址に行くのは2015年以来であるが、2015年と違い青山勲さんの説明があったことで、歴史の勉強にもなった。その後、平和ガイドでもある青山礼子さんから、チビチリガマとシムクガマの説明を受けた。私自身チビチリガマについては2017年9月に地元の少年たちが肝試しをして荒らしたというニュースで、初めてその存在を知った。ただ、戦時中悲惨な出来事があった場所なので地元の人もあまり話さない場所で、「若い人が知らないのも無理はない」と教えられた。シムクガマについてもここで初めて知った。ガマとは沖縄の方言で自然洞窟のことである。

戦時中、チビチリガマとシムクガマでは対照的な結果となった。当時「アメリカ兵に捕まったら凌辱され殺される」と信じ込まされていた沖縄県民にとって、捕虜になることはあり得ない選択肢であった。チビチリガマに避難していた住民は「もう隠れきれない」と悟ると集団自決という手段を取った。一方シムクガマに隠れていた住民は、ハワイ在住経験のある老人2人に説得され、全員が捕虜になる選択をした。結果、1人も死者が出なかった。このようなことを説明してもらった。夜はごちそうを振舞っていただいた。



図 32 (左上) 都屋漁港の様子, 図 33 (右上) 嘉手納基地の様子

図 34 (左下) 座喜味城址見学の様子, 図 35 (右下) 晩御飯で振舞われた家庭料理

(撮影はいずれも 2018 年)

また、今年度は例年お世話になっている「むら咲むら」において、例年以上に多くの活動を行った。



図 36(左), 図 37(右) むら咲むらでの活動の様子 (2018 年撮影)

2019 年度行程

8/27(火) 14:30 那覇空港集合

旧海軍司令部壕見学

→南部へ移動

ホテル着 (ホテルスカイブルー)

8/28(水) ホテル発

ひめゆりの塔, 平和祈念公園を見学

ホテル着 (同上)

8/29(木) ホテル発

嘉数高台公園から普天間基地を俯瞰する, 製糖工場見学, やちむんの里見学  
読谷村で民泊開始 (入村式)

8/30(金) 民泊先のご家庭におまかせ

昨年度同様青山家にお世話になったのと, 今年度は人数が多かったので仲原家にもお世話になった。青山家では去年同様にご対応いただき, 仲原家では一緒に家庭料理を作ったり, 貝殻細工を作ったりした。

8/31(土) 民泊終了 (離村式)

むら咲むらにて各種体験: シーサー作り, ちんすこう作りなど→北部へ移動  
ホテル着 (センチュリオンホテル)

9/1(日) ホテル発

マングローブ見学

美ら海水族館見学, 辺野古見学, アメリカンビレッジ見学 →那覇へ移動

ホテル着 (ロワジールホテル那覇)

9/2(月) ホテル発

自衛隊見学, 首里城見学, 国際通り見学

那覇空港着 東京へ

付添い: 村上豊 (1日目~3日目), 水上雄亮 (1日目~7日目)

2019年度はこれまでで最も多い8人が受講し、初めてレンタカー2台での移動になった。今年度は製糖と沖縄の焼物に興味のある受講生がいたため、3日目には読谷村内にある製糖工場とやちむんの里に行き、見識を広げた。やちむんとは、「焼き物」の音が変わってきてきた方言である。

また、今年は受講生が8人と多かったため、昨年度の青山家だけでなく、仲原家にも協力していただき、2つの民家に泊まらせていただいた。



図 38 (左) 製糖工場見学の様子, 図 39 (右) やちむんの里の登り窯 (2019年撮影)



図 40 (左) カチャーシーを踊る様子, 図 41 (右) 民泊でお世話になった方々との集合写真 (2019年撮影)

また、この年は5年目にして初めて航空自衛隊を訪れた。自衛隊の活動について何うことができた。



図 42 (左) 航空自衛隊検問所, 図 43 (右) 自衛隊内で説明を受けている様子 (2019 年撮影)

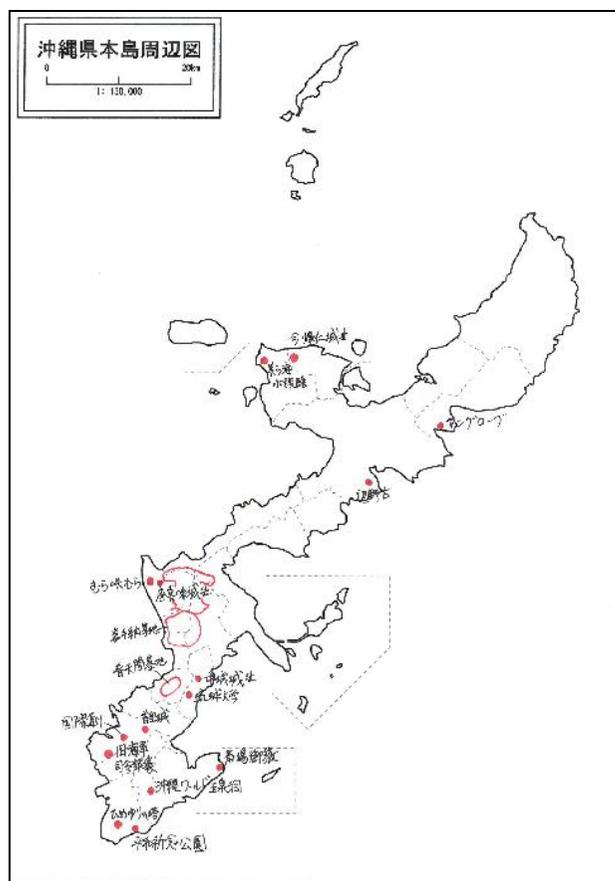


図 44 5 年間で訪れた場所

### 3. コロナ化における活動

2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、宿泊を伴う学校行事を行うことができなかった。しかし、沖縄に関する学びを続けるため、今年度も沖縄に関する講座を開いた。どのような講座が良いか色々と考えを巡らせたが、2020年度は「沖縄の歴史」について講義形式で行うことにした。私自身は数学の教員であり、沖縄の歴史についてはほとんど知らなかったが、一番は自分の勉強になると思った。また、素人の私がやるだけでなく、専門家にも話をしてもらいたいと思ったので、2017年度にお世話になった富山奈那氏に今年度も琉球方言について講義をしていただいた。富山氏はこれまでの業績が認められ、2018年度から琉球大学の准教授になっていた。また、今年度はZOOMを用いた遠隔講義をしていただいた。当然初めての経験なのでうまくいか不安だったが、なんとか無事開催することができた。



図 45 9月29日 ZOOM 講義の様子（本校 HP『校長散歩』より抜粋）

また、基本的には2週に1回程度のペースで私がPPTを用いて沖縄の歴史について講義を行ったが、最後に本校の猪尾和広教諭に講義をしていただいた。猪尾教諭は沖縄に関して深い見識をお持ちなので、これまでの私の講義の流れを踏まえて「琉球処分と廃藩置県（廃琉置県）」について話していただいた。

### 4. 受講生の感想

直接感想を集めているわけではないが、受講生が作る小冊子の日程欄や論文中に生徒の感想を見ることができる。「楽しかった」「行って良かった」「また行きたい」など肯定的な言葉が並ぶ。特に18年度以降、民泊を行程に入れるようになったが、ある受講生は民泊が「想像の何十倍も楽しかった」と述べている。民泊でチビチリガマとシムクガマについて学んだことで、論文のテーマをそれに変更した受講生もいる。受講生は民泊を通して知識だけでなく様々な経験を得たようである。また、辺野古テント村での説明を受けて、「政治

的なことは置いておいて、沖縄の基地問題を自分のこととして考えることができた」と述べている受講生もいる。

## 5. 6年間のまとめと今後の展望

5年間の沖縄での活動を振り返って、最初は家族ぐるみの活動だったところから、開邦高校との交流、現地研究者との交流、民泊での地元との交流と、少しずつ交流範囲が広がっていることがわかる。今後も様々な交流を通して沖縄について多角的に学ぶ機会を設けたい。また、1-1. 目的のところ「自分たちで作る修学旅行をイメージした」と書いたが、概ねそのイメージを踏襲することができていると考える。本校は「自調自考」が一つの教育方針だが、まさに私自身がこの総合講座を通して「自調自考」していると感じる。

これまで「基地問題」、「沖縄戦の歴史」、「沖縄の自然」、「沖縄の文化」など、様々な研究テーマに合致する施設を選び、訪れていたが、今後も必要な施設を開拓していきたい。特に、これまで珊瑚、海洋生物を除いて「沖縄の生物」を研究テーマに選んだ受講生はいないが、例えば「ヤンバルクイナ」に関しては、国頭村に「ヤンバルクイナ生態展示学習施設」があり、そこでヤンバルクイナについて一通り説明を聞くことができる。私自身2019年に初めてその存在を知り、実際に行ってみたが、非常に勉強になり、ぜひ受講生も連れていきたいと思った。また、これまでの5年間は沖縄本島だけでの活動であるから、今後は離島、例えば宮古、八重山に焦点を当ててもいいかもしれない。今年度歴史について学び、宮古上布というものを知った。江戸時代には、「北の越後、南の宮古」と呼ばれ、偽物が出回るほど価値があったらしい。他にも八重山上布や久米島紬というものもある。こういった着物についても実際に現地で学ぶ機会があっても良いかもしれない。また、西表島には有名な「イリオモテヤマネコ」がいるし、日本最西端の島、波照間島からは、台湾を望むことができるそうである。これらを実際に見ることも良い経験となるだろう。

また、5年間の取り組みで課題も見えてきた。1つには拠点を転々とするこの大変さが挙げられる。付添いの村上教諭から「拠点を1つ2つに決めて、そこから活動するようにしたら？」といった助言をいただいた。沖縄本島だけでも道のりとして縦に130kmほどあり、活動範囲は、南は平和祈念公園から北は美ら海水族館、あるいは慶佐次川マングローブまで、およそ100kmはある。拠点を例えば南部と北部に1つずつ設けて、その範囲で活動できるか、それは今後の検討課題である。また、別の課題としては、移動が教員の運転に依存している点である。今のところ特に問題なく機能しているが、教員にも常に病気やケガのリスクがあるのと、万が一事故を起こした場合の責任を考えると、今後もこの形態で続けていいのか、考えなければならない。

## おわりに

これまで6年間総合講座「沖縄」を行うことができたのも、様々な方々の協力、助言のおかげである。豊住教諭、村上教諭、水上教諭、OBの石井さんには、運転を含め、実際に現地での活動を補助していただいた。加藤十握教頭、小池教諭には色々と助言をいただいた。また、本校の理科教諭だった故・高江洲教諭にも、生前ご自身の活動について様々な資料をいただいた。

現地においては、「平和祈念公園・資料館」、「ひめゆりの塔」、「沖縄ワールド玉泉洞」「旧海軍司令部壕」、「むら咲むら」、「美ら海水族館」、「やんばる自然塾」の方々には毎年のようにお世話になっている。また、2018年度、19年度は「ちゅらむら読谷」さんにお世話になり、青山家、仲原家に民泊する機会をいただいた。青山勲さん、礼子さんご夫婦には2年間お世話になり、民泊2年目には仲原政治さん、節さんご夫婦にもお世話になった。

當山奈那准教授にも、2017年度、20年度と、琉球方言について貴重な講義をしていただいた。また、本校の猪尾教諭にも講義をしていただいた。そして何より、陰ながら支えてもっている家族にも感謝の意を述べたい。

最後に、初年度生徒代表として、92期の柴海一朗君の論文を掲載する。

## 関連資料

武蔵のいま 2016年 Vol.4 10月号

——「武蔵生の2016夏休み探求レポート」として、対馬、北海道の取り組みとともに、沖縄での活動と生徒の感想が取り上げられた。

校長散歩 201 武蔵の授業1—高1総合講座—2020年10月1日付

——本校HP上にある校長ブログ「校長散歩」にて、ZOOM講義の様子が取り上げられた。

月間高校教育 2020年12月号 p60—p61

——本校でのコロナ禍での総合的探求の時間の活動の1つとして、ZOOM講義の様子が取り上げられた。

## 沖縄の城の完成形について

高校1年 柴海一朗

### 目次

- ・はじめに
- ・城の構造について
  - 石垣
- ・城について
  - 今帰仁城
  - 座喜味城
  - 中城城
- ・結論
- ・おわりに

### はじめに

70年前に終結した第二次世界大戦において沖縄本島は最後には占領されたがそれまでの島嶼部防衛戦と比べると善戦していた。これは、本土が近いこと、日本に編入して半世紀以上たっていたこと、陸軍戦闘方法を変えたこと、などが大きかったがグスク(以下「城」)の堅牢さも一役担っていた。その強さは米軍の現地司令官に「城を無力化するには石垣を端から端までしらみつぶしに爆破するしかないと思う」と言わせるほどであった。

本研究では時代考証がおかしく戦国時代の戦術の専門家でもなく城の建物の形、配置がっていないが、本土の戦国時代に、完成した城が巻き込まれていたら、という設定でその完成形を見てみたいと思う。サンプルとして今帰仁城、座喜味城、中城城、首里城を使用する。

### 城の造りについて

#### 石垣の積み方

本土とほぼ同じで野面積、打込接、あいかた積の3形が主に使われた。ここではそれぞれの積み方について説明する。

野面積　　自然石をほぼ加工せずに作る。本土では鎌倉～戦国の城によく見られた。

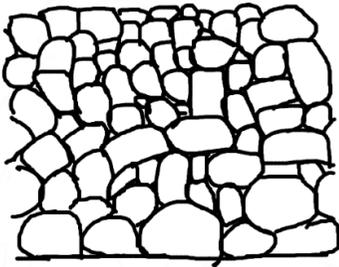
例として高知城天守の石垣が挙げられる。

打込接

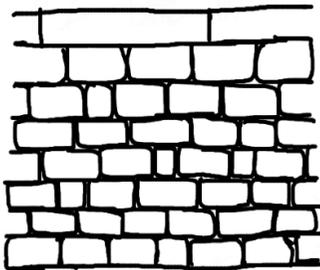
石を石垣表面が平らになる様に加工し作る。他の2法と比べると目地が揃っているため強度に問題がある。本土では関ヶ原の戦い以後多用されていた例として津山城天守跡の石垣が挙げられる。

あいかた積

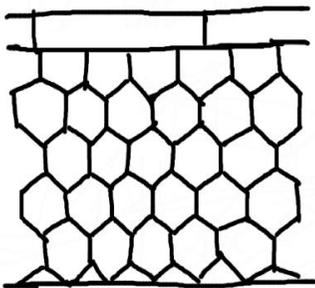
資料によっては相方積とも書くことがある。六角形に加工した石を隙間が無い様に作る、いわゆる亀甲積。本土では江戸後期の城に見られる。沖縄では護佐丸が15世紀に考案したといわれている。



今帰仁城石垣



中城城石垣



首里城床面

上から野面積、打込接、あいかた積の簡略図と写真

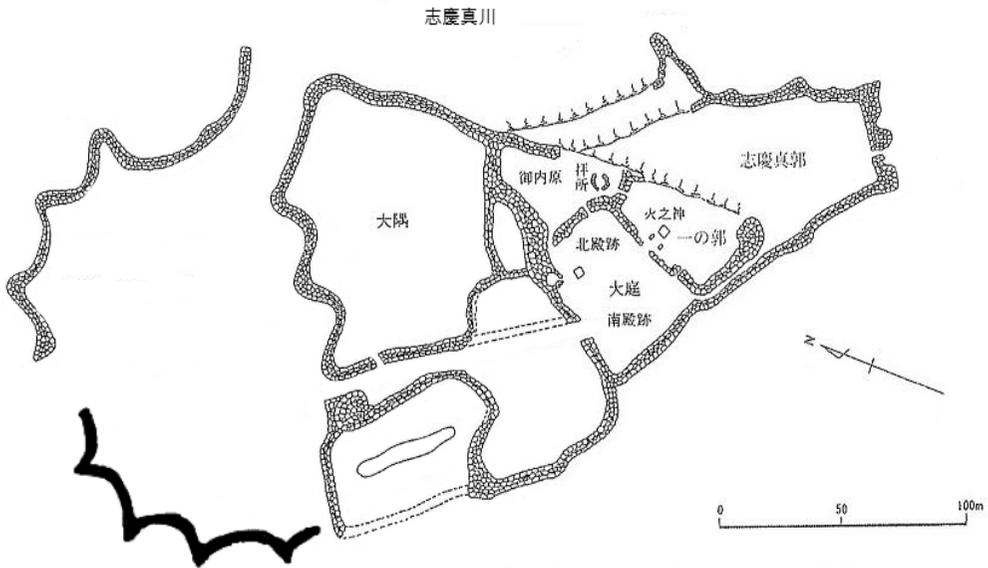
## 城について

ここでは城の成り立ち、立地と基本的なことから戦闘力（防衛力）を見ていきたい。なお、限定的であるが戦闘方法は短期戦で敵は強攻のつもりで準備し今帰仁→座喜味→中城と順に侵攻するものとする。他の城からの応援は考慮せず、城一つ一つの戦闘力を見る。また城を急改造することは全くないものとする。

今帰仁城　この城は二度戦禍に巻き込まれている。一度目は中山王による北山王国（山北王国）への侵攻時、北山王（山北王）が居たため攻防戦の舞台となった。この時は臣下の裏切りで戦闘に負けはするが、中山側は手堅い城の守りにてこずった。二度目は薩摩侵攻時であるがこの時は薩摩来襲を聞きつけた監守が逃げた後の空き館に火を放った、というもので、戦闘は無かった。

立地は東に崖のすぐ下を志慶真川が流れ、南から南東にかけては斜面と小山が広がっており防衛上有利である。唯一開けているのが北西であるが曲線の入隅（石垣が屏風の様になってへこんでいるところ）の有る長い石垣を作ることで防衛上不利な点を補っている。しかし、外に面している多くの石垣は野面積みであるため矢を補給、などしている間に敵兵が登ってくる場合も考える。また火矢が配備されていたとしても、正確に撃とうとすれば石垣に狭間が無いから体を乗り出して打たなければならないためほぼ確実に射手は鉄砲狙撃により死んでしまうのであまりいい方法では無い。しかし、これは弓矢にも言えることであるため結局石垣防衛はとても厳しい。

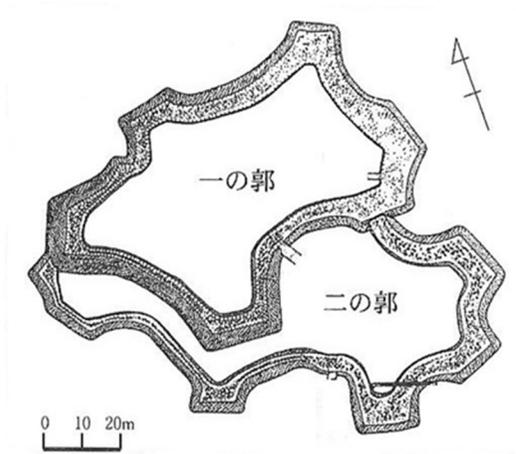
以上より東には監視に少し、南西には三分の一ほど北西に三分の二ほど兵力を割くのが理想である。しかし、（素人目）だがこの城には平時で100人～200人ぐらいしか専門戦闘員が入らなさそうなので、屈強な男性陣が後方支援に回らなくてはいけなさそうである。また、約半数の女性は御嶽で祈願を行うと考えられるので、ただでさえ男性がいないため食品生産力が落ちているのにさらに下がると予想される。また、作物を育てるといっても恐らく少ししか生産できないため、防衛戦を大庭をまで下げたのち沖縄の戦闘を見るに餓死者まで出すとは思えないので、2週間ほどで敵兵を60人～70人ほど倒し、また城内に井戸もないため兵糧において降伏すると思われる。



座喜味城 護佐丸によって15世紀初めに築かれた城である。それまで護佐丸は一時的に北山守護として今帰仁城にいたが、尚忠が「北山監守」として派遣されたため交代し、また、今までの山田城（恩納村山田）では首里から遠いためその城を崩し、座喜味に新たに築城したとされている。

立地は北西から西と東に急な斜面があるが、南と北東が緩やかな斜面で少し開けている。また東の城側は5mほどの幅であるが南から回り込める場所がある南の石垣はこれまた入隅の多い立派な作りになっているが、北東の形は少し心許ない分南側より1mほど高く積まれている。外壁の積み方はほぼ打込接であるため、敵兵が登ってくる心配は少ない。

以上より南～東～北東の防衛戦上に全兵力を向けるのが理想だが、ここまた護佐丸が十数年で最高技術を込めて作った城なだけあって、本研究の三城中一番小さい。そのため、やはり80人～120人ほどしか専門戦闘員は入らなさそうである。守る規模も小さいので今帰仁ほど苦戦はしないと思われるがその代わり後方支援も足りなくなると考えられる。また構造的に石垣の上から攻撃は今帰仁と同じことがいえ、為政用の城であり畑も無いようで、そのうえ城内に井戸無いため、こちらもやはり敵兵を50人ほど倒し、兵糧において一週間ほどで降伏すると思われる。



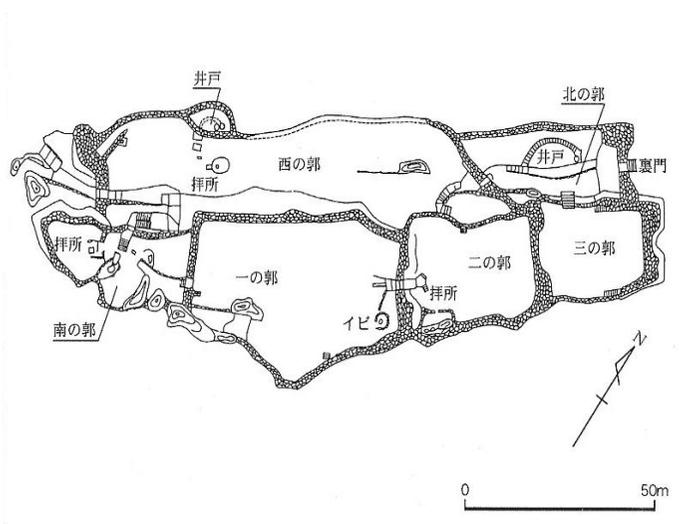
中城城　　現在は「中城グスク」といわれているが、本来は島の中央部にあることから「中グスク」と呼ばれていたと考えられる。中山英祖王が息子を「中城按司」に任じ13世紀後半に築かせたといわれる。

1440年頃に護佐丸が中城按司として入城する前までは、南の郭、西の郭、一の郭、二の郭の四連郭構造であったが、それ以後は護佐丸が北の郭、三の郭を増築しより強固な城となった。このことで、すでに大きな井戸2つ、小さいものは数個を城内にもっていたが、さらに1つの井戸を取り込み、兵糧攻めに強くなった。

立地は北西に崖、南東に急な斜面、北東に50mほど斜面が、南西には小山がある。これに石垣が加わるので戦闘の観点から見ると申し分無い様に見えるが、石垣が（沖縄戦国時代に作られたのに）入隅が少なく防御力は多い時に比べ多少劣っている。しかし、南東の石垣には（信仰用にあるというのが通説だが）狭間となりうる穴があり、今帰仁、座喜味の戦訓によりとても有効な打撃を与えるのに使われるだろう。

以上より前二城よりは圧倒的に善戦しうると考えられる。城郭も広く前二城が交戦している間に準備が出来、250人～320人近く専門戦闘員を収容できるように見られる。戦力は北東に三分の二ほど、南西に少数尖鋭の三分の一ほど割くのが理想であり、実行可能そうである。

結局兵糧において降伏するだろうが前者と違い一ヶ月ほどで敵兵を100人～150人ほど倒してから降伏すると思われる。



## 結論

すべて兵糧攻めにより降伏するが、今帰仁は具体的な敵の戦術が知られてないこと、座喜味は致命的な構造欠陥により苦戦するが、一ヶ月ほどの戦術研究、準備期間のあった中城は善戦すると見られる。以上より戦闘用の城としては中城が完成形と言える、と結論付ける。

## おわりに

やはり戦国時代に一番有力な勢力が作った城を戦国のエース護佐丸が改修した中城城がいちばん強かった。

まだ、私が戦術を研究しきれてないのも相まって、全ての城で降伏するだろう、などと拙い論文になったが次は沖縄思想も考慮して研究したい。

## 参考文献

- |            |              |               |
|------------|--------------|---------------|
| 戦国の堅城Ⅱ     | 発行所          | 株式会社 学習研究社    |
|            | 2006年 1月 10日 | 第一版発行         |
| 図説・戦う城の科学  | 著者           | 萩原さちこ         |
|            | 発行所          | SBクリエイティブ株式会社 |
|            | 2015年 4月 25日 | 初版第1刷発行       |
|            | 2015年 5月 20日 | 初版第2刷発行       |
| 座喜味城パンフレット | 2015年 9月 1日  | 時点            |
| 中城城パンフレット  | 2015年 9月 1日  | 時点            |
| 今帰仁城パンフレット | 2015年 9月 1日  | 時点            |